

私の死生観

鎌田東二
哲学者・宗教学者・詩人
京都大学名誉教授

子供の頃、理性的に説明できない経験を二つ持っていた。一つは、私が「オニ」と呼んだ存在を何度も見たこと。もう一つは、全く同じ夢を何度も繰り返し見たこと。この二つである。私の死生観の根幹にはこの二つの経験と疑問が横たわっている。

それは結局次のような問いかけになった。世界とはどのような存在（存在形態・世界構造）なのか？そして私はその世界の中でどのような次元に、どのような形態で嵌め込まれているのか？結局、存在とは、世界とは何か、そして、私とは何者か、という問いである。

このような経験と問いがあつたために、私は子どもの頃から、世界が多次的に存在しているという思いを拭い去ることができなかった。そしてこの世の次元はたまたまこのような形で存在しているが、なにゆえにか、そうした先行する多次的な世界から生み出されてきた後発世界ではないかと考えていた。

そんな考えを持っていたために、高校二年の時にプラトン哲学を知った際、異常に嬉しい思いがした。自分の考えとよく似た考えを持っていた人がすでに遙か過去に存在していたという喜びだった。

プラトンは、世界は現象界と実在界の二種によつて成つていてと考えた。現象界の方は粗雑で解像度が低く、物事の真実がよく見えない。しかしもう一つの実在界であるイデアの世界は真の实在の世界であるから、すべてが筒抜けで真実が共有され明らかである。肉体を持つてこの世の物質的次元に生きている私たちは、したがって、生きながらにしてその真の实在の世界に立ち還るレッスンをしなければならぬ。その真の实在界を思い出す作業こそが哲学である。哲学とはエロスの衝動に基づくイデアの探究であるが、同時にそれはイデアの世界を思い出す想起の作業でもある。生存の根源的な欲動であるエロスと真実の世界への参入となるタナトスとはメビウス

の輪のようにつながっている。

この考えは、小さい頃からの私の疑問と直観にフィットした。私は初めて自分の考えと共通する考えの人と出会って安心することができた。以来、私はプラトンに対する尊敬の念を持ち続けている。後に、新プラトン主義やグノーシス主義と出会った時にも、子どもの頃からの自分の考えと直観に非常に近いものがあると親近感を持った。

哲学的に言えば、世界を實在論的に捉えるか、関係論的に捉えるか、存在論上大きな違いがある。プラトンもバラモン教・ヒンドゥー教もキリスト教も前者の實在論的な思想であり、仏教の縁起思想は典型的な後者の関係論的な思想である。私は四国の阿波徳島の南部（阿南市桑野町）出身なので、四国八十八ヶ所の第二十一番太龍寺と第二十二番平等寺が近くにあり、お遍路さんがよく通っていて、わが家でもお遍路さんが御詠歌を詠つたり御祈祷してくれたりすることやお接待で泊まつたりすることもあつたので、遍路旅には郷愁だけではなく、存在論的な象徴性を感じてきた。つまり、この世の人生というものは、お遍路さんのようなものである。札所はそれぞれの人によって少しずつ異なり、それが十番あるか、二十番あるか、八十八番あるか、百番以上あるか、違いはあれども、そのような縁ある場所を巡っていく旅である、そんな人生観がどこかに反響している。

仏教の根本に縁起や空の思想があるので、世界を関係論的に捉える視点と感覚も自分の中に出来上がつている。が、プラトンやバラモン教やキリスト教的な實在論的な感覚も残響している。いずれにせよ、多世界論で、しかも関係論的に出来上がっている一種仮初のこの世を生きて、出逢つて、むすび（結び・神道）とほどき（解き・仏教）の神仏習合的関係を生きているというのが実感である。天台教学で言う「空・仮・中」の三諦の思想が私の実感に近いところがある。

とはいえ、自分の死生観が整理された形で、これだ、という形で出来上がっているわけではない。むしろ、人生上の諸経験や共感してきた思想などが重層し書きさされて混声合唱団のように鳴り響いているというのが素の姿だ。

二年前に『日本人は死んだらどこへ行くのか』（CHUBI新書）を出し、そこで日本人の死生観や現代人の死生観を探り、自分史的に自分自身の死生観の結節点にある経験も語っているが、それでも死んだ後のことは確実なこととは言えない。あの世があり、生まれ変わりもあると確信しているが、しかし、それがどのような形で当の自分自身の過程になっているかは定かにはわからない。

輪廻転生もあると思つている。プラトンの『国家』を読んだ際、最後の方でソクラテスが戦士エルの臨死体

験の経験を語る場面があり、そこで死にそうになったエ
ルがあの世を経巡り、死の世界を垣間見てこの世に戻っ
て来てその経験を語ることが記されていた。なぜ
プラトンは、正義や国家について考察する著作の最後に、
そのような死の世界を垣間見る経験を語らねばならな
ったのか。それは正義や倫理の根源があつた世の側、靈魂
の世界、イデア界にあることをわからせたからであ
らう。この世の法則だけでは、生も死も捉えられないと
いうことをプラトンは国家論で言いたかつたのであろう。

小さい頃に繰り返し見た私の夢とは次のようなもので
あつた。——左の手のひらに米粒ほどの玉が乗っている。
幼い私は何気なしにそれを見つめている。そのうちに米
粒ほどの玉がどんどん膨らみ、ピンポン玉ほどになる。
さらに膨らみ、テニスボール、バレーボール、バスケット
ボールと膨らみつつける。そこで、しつかりと両手で
支え、両足を踏ん張って支えなければと思つて、地面に
足を踏ん張ろうとした。その途端、突如として、そのボ
ールが爆発的に膨張し、その爆発のあおりを食らつて、
どこまでもどこまでも漆黒の宇宙空間の彼方へはね飛ば
されていく。私はそのボール（玉？ 惑星）にしがみつ
いたまま、どこまでも押しつぶされそうになりながら飛ん
で行く。そのあまりの重圧と遠心力に飛ばされていく感

客はいたが、それほどの数ではない。強い日差しの中
で緩慢に移動する人びと。

地形を見直し、アポロン神殿の脇からパルナツソ
スの山に登つた。山頂で誰もいないのを確認して素
裸になつた。小学五年の時、『古事記』を読み、続
けざまにすぐギリシャ神話を読んで以来、ギリシャ
に憧れていた。そしていつしかギリシャに行つたら、
その輝くばかりの陽光の下で真裸になつてその光を
一身に受けたいと思ひ続けてきた。三十歳の夏、そ
の子供の頃からの願望を達成した。

素っ裸で祝詞を奏上し、龍笛を奏でた。その時、
ダダダダと空が鳴つた。ダイナマイトでも仕掛
けて山を爆破しているかのような。おそらく観光客
相手のリゾートホテルを建てるために山を切り崩し
ているのだらう。そう思うとむしうにかなしくな
つた。

たつた一人の儀式を終えて、宿の近くのタベルナ
に入つて遅い昼食を摂ろうとした。途端、これまで
経験したことのないスコールが襲つてきた。篠突く
雨というか、爆弾のような連射砲のような雨雨雨。
その時、強烈な閃光が走り、しばらくして物凄い音
響がダダダダと空が鳴り響いた。それはカミナ
リだつた。身震いするほどそそけだつた。

覚に畏れを抱いて、「ウワァーッ！」と大きな叫び声を
あげて目を覚ます。そんな夢を繰り返し見た。
なぜこの夢を繰り返し見るのか、不思議でならなかつ
た。それも、その夢は普段の平常な時の夢ではなく、必
ず熱が出た時にうなされる夢で、悪夢とは思わなかつた
が、畏怖の念を抱かせる夢であつた。以来、夢の中で
お告げのようなものがあることも受け入れるようになつ
た。その後の自分の人生上での主要な不思議の経験は、
本年九月一日に上梓した第三詩集『狂天慟地』（土曜美術
社出版販売）に時系列に並べて書いた（Ⅱ「驚天動心」の章）。
そこに書いた夢で、現在も指針になつてゐる夢のメッ
セージがある。『狂天慟地』のその部分をそのまま以下
に引いてみる。

一九八一年八月、デルフォイの神殿に立つた。雲
一つない抜けるように蒼い空。どこまでもその蒼の
中に墜ちていくような。

かつて古代ギリシャのアポロン神殿のあつたそ
の場所は、今は神託も信託も託される何ものもなく、
真昼間の何一つ翳りのない陽光の中で明るい廃墟で
あるばかりだつた。その昔、アポロン神殿の権威は
ギリシャ全土に広がり、汝自身を知れの格言が神殿
の額に掲げられていたという。今はちらほらと観光

その夜、夢を見た。泉の前に立つていた。泉から
金色の湯煙が立ち上つてくる。そこに近づき、飛び
込んでいきたい気持ちがあるのだが、恐れ多いよう
な神々しいような畏怖の念を感じて佇んでいた。そ
の時、金の泉の中から声が聞こえてきた。

「美しいものを美しいものとして見るのではなく、
醜いものを醜いものとして見るのでもなく、ただあ
りのままに見つめよ」

そして、予言の言葉が続いた。何処から来て何処
へ行くのか。その道筋を示す言葉を得て慄然とし、
ありのままに見つめることを座右の銘とするほかな
かつた。行き先は不明でもその流れに乗るほかな
かつた。
（「デルフォイの夢」六六一―六八頁）

私は自分の人生を総括し決算するつもりで、一年間で
三冊の詩集を出した。第一詩集『常世の時軸』（思潮社、
二〇一八年七月十七日刊）、第二詩集『夢通分鏡』（土曜美術
社出版販売、二〇一九年七月十七日刊）、第三詩集『狂天慟地』
（土曜美術社出版販売、二〇一九年九月一日刊）の神話詩三部作
である。まことに大げさだが、この神話詩三部作は遺作
か遺言のつもりで出した。特に「みなさん 天気は死に
ました」で始まる第三詩集『狂天慟地』はその思いが強い。
破局に向かいつつある世界と社会の中をどう生き抜

くか、死ぬか、覚悟し、未来につながるかを描いた。
『狂天働地』『驚天動心』の「噴火」に書いたとおりだが、私は今から五十二年前、十七歳の高校二年から三年になる時に一人で青島に立ち寄った。この時の衝撃により、突然、火山弾を口から噴き出すように、詩を書き始めた。それから五十一年、折に触れて詩を書き継いできたが、その一方で、詩と言葉の問題を、筑波大学に提出した博士論文『言葉の思想』（青土社、二〇一七年六月）にまとめ、次に、続けさまに上記三冊の神話詩三部作の詩集を出した。

第一詩集『常世の時軸』に出てくる「常世の時じくのかくの木の実」とは、エデンの園の「いのちの木の実」の神道版（『記紀神話』伝承で、その「時じくの実」が今ないけれども存在論的にありうるというグノーシス主義的かつ否定神学的メッセージが第一詩集である。第二詩集『夢通分婉』は、その時軸と接続・交感できるのは「夢通」回路で、それによって誰しも「分婉」する世界に参入・交感することができるけれども、その世界との接続は私たちの器によって変わるの、苦悩も喜びもそこに生起することを描いた。そして最後の第三詩集『狂天働地』は一連の神話詩三部作でもっとも訴えたかったところで、この三〇年の地球環境の大変貌の中で、生老病死のペインと希望を描いている。

の国に身まかり、そこに夫の神が探しにやって来る。「どうか、元の世界に戻って来てほしい」と夫は言うが、妻はすでに黄泉の国の食べ物を食べてしまったので、もう元の国には戻れないと思うけれど、あなたがそれほど熱心に頼むのなら黄泉の国の大神と相談してみます、ただその間わたしを絶対に探さないで下さいと答えるのであった。

だが、その戒めは破られる。「見るな」と言われれば見てしまう。「言うな」と言われれば言ってしまう。「行くな」と言われれば行ってしまう。そんな反対心理と行動を多くの人間は取るが、神々も同じであることを世界中の神話は告げている。タブー（禁忌）は拘束力を持つが、しかし破られる。そして、タブー侵犯という破壊や破局の後に新たな創造ないし再生がくりひろげられる。世界はそのままで終わらない。破れがあっても、それを自己修復する。それが生命というものの、存在というものの力でありはたらきである。そんな根源的な生存世界の存在原理を神話は根源的な物語として語り継ぐ。

私は洞窟が非常に好きであるが、この物語は洞窟的である。言い換えると、世界は一つの洞窟であるが、別の洞窟もあるということになる。その洞窟から別の洞窟に移行すること、それが「死」ということになり、どちらの洞窟においても「生存」はある、ということになる。とすれば、死と生は、光と闇、昼と夜のように、あざな

まことに野暮な自註であるが、十歳の時に『古事記』とギリシャ神話を読んで以来、神話は私の中では死生の枢軸を占めている。そしてその神話と儀礼が聖地につながるものが私にとってのいのちの確認であり、いのちの洗濯である。そのいのちのコンパスに従ってこの世を流離うほかすべはない。そのような途切れ途切れの死生観の中に今ここの私の死生観がある。

自分の死生観の根底に、神話と儀礼と聖地がひとつながりになって横たわっている。神話というのは、私の考えでは、壊れるようなものでも無くなるようなものでもなく、存在それ自身を支える根源的な物語である。神話はしたがってフィクションではなく、存在を存立せしめる基本条件となる世界観だということになる。そのような神話に基づいてさまざまな儀礼が執行される。そして、そうした儀礼が執行され、神話が語られ共有される特別な空間が聖地となる。そこで、神話と儀礼と聖地はひとつながりのものとして互いに連携しながら相互に支え合っている。

私が神話に初めて触れたのは、小学五年、十歳の時である。小学校の図書室で何気なしに手にとった『古事記』の物語に有頂天になった。神々が次々に現われ、日本列島の島々を産み、火の神を産んだ母神が焼け爛れて黄泉える縄のように交互に移行し合い、補足し合っているということになる。

別の言い方をすれば、複数洞窟論は多世界論であり、さまざまな世界に連絡網で繋がっているということになる。そこをつなぐモノ・コト・時空、つまり、回路やチャンネルがある。そのような媒介項により、それぞれ独立して成り立っている世界がつながる。世界は多孔・多網・多界である。我々はその一部しか知らない。その一部ですら、十分な解像度・理解度がないので、よくわかっていない。わかっているように思い込んでいることも、一つの臆見、思い込みであり、ドグマである。

「死」と「詩」はそのような思い込みに切断線を入れてくれる。自分の臆断臆見を解体しつつ、別の洞窟のありかを垣間見せてくれる。すべてがわかることはない。しかし、分からないことの意味と形がよく分かってくる。無知の知も、知の知も見えてくる。「死」という洞窟は、一個の生命の破壊と解体のプロセスであるが、同時に一つの知覚や知の構造の解体過程であり、移行過程ということになる。

私は「死」に至るが、「死」に至るためにも「詩」が必要なのである。『常世の時軸』『夢通分婉』『狂天働地』の神話詩三部作はそのような私の死生観洞窟の一移行過程であるにすぎない。